

平成二十三年八月一日発行  
通巻1057号(第11回1冊別付)

# 京鹿子



8月号

夏季吟旅特集号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その三十六

葉桜やまんなかといふことはなく

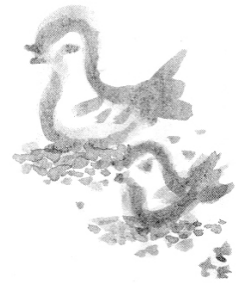
角々にバラ高く盛り園の午後

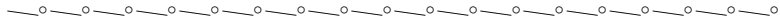
周濠の水かげろふや青葉陰

光とばす茅花や野末に古墳置き

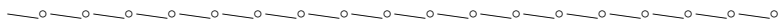
高がかかる堺灯台白南風裡

白南風や呂栄の壺を揚げし港



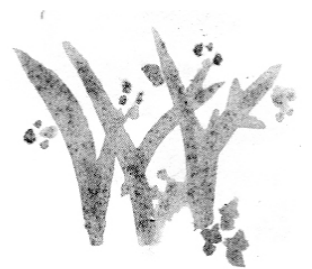


登りきて慈悲心鳥の森の径  
早苗月となりの村へ風つれて  
野の茂り分厚さといふ日の履歴  
野の茂り温みを放ちつつ暮るる  
時の日やデジタルといふこまぎれ時  
父の日や遠ざかるもののひとつ巖  
ひとすみは月のあぢさゐあかりなる  
手さぐりにともせば梅雨の底めく灯



カ  
ン  
ナ  
燃  
ゆ  
丸  
山  
佳  
子

夕立の庇ぬけ降りに豆腐切る  
大雷雨猫の憂ひの目とあひぬ  
濃朝顔夫へ倫理の花ひらく  
カンナ燃え夫待つこゝろ書はしづか  
羽蟻の夜甘えて泣けばをかしくなる



## 秀華採集

片恋は過去形のままひな納め

鷺山 珀眉

季語の設定がよい。たぶん過去形の片恋はまた来年雛とともに心に飾られることであろう。それでよい。恋は実らない方が恋らしくもある。

ほうと口あけし埴輪や山笑ふ

竹内 久子

夏帽子人それぞれの翼かな

安田 優歌

前句の組み合わせは共に春の姿であるが、微妙に響き合っている。後句の「翼」は夏帽子を被つてのそれぞれの広がる思い、それをうまく具体化している。

鈴鹿 仁

梅雨蝶

髪切虫暮色そふやす裏鬼門

曝書せる明治ものにも栞あり

万緑を抱く一城の風とゐし

城中のからすは自在梅雨晴間

梅雨蝶の一心とす城めぐる

近 詠

和田 照海

矢掛本陣

宿札の裏はくらやみ若かへで

里守の水見櫓や桐の花

嵐山は借景にして藤の花

すかんぽの風の青さや脇本陣

投げ売りの大筍や本陣市

神麓集



九段坂 北村 香朗

いち早く開花をつげる九段坂  
引きあとのためらひがちの花筏  
花筏ひとすぢの道のがさずに  
カレンダー破る音して四月なる  
切り捨てる音いつまでか四月馬鹿

草 笛 藤岡 紫水

草笛を吹きて卒寿を自祝せり  
目に觸るるものみな光る風五月  
竹皮を脱ぐや育ちし高さより  
夕牡丹地に置く影を濃くしたり  
せせらぎに揺れて差し込む新樹光

盆の月 竹貫 示虹

目に見えず地球は動く盆の月  
思ひ出は花火や胸に開けども  
われ残し音なく消えし流れ星  
秋暑し掌に身もだえのオブラート  
回想のきりなく歸る盆燈籠

松田 都青

逢ふて憂し逢はねば更に憂き春夜  
行く春を噛んで甘さを滴らす  
ふらふらと猫の尾を踏む花疲れ  
空き缶を蹴ればわが身よ花の坂  
花吹雪浴びてこの世に直立す

月見草 丹生をだまき

醒めぎはの夢の名残りか梅雨の鬱  
中空にまくなぎ渦を巻く夕べ  
まくなぎに取り囲まれて日暮坂  
月見草いくつになつても浪漫派  
月見草咲ける河原に回顧しきり

花 桐 柴田 朱美

本籍に置きし山河と桐の花  
花桐と土蔵がありて嫁きおくれ  
言ひ馴れしやさしき言葉桐の花  
をんなには隠れ部屋あり桐の花  
表札の残る廃屋桐の花

# 神麓集



鳥 巢 丸 井 巴 水  
辛口のカレーで五月始まれり  
矢車の独り遊びや夜は深し  
岩割つて伸びし櫨に苔の花  
鳥巢洞隠しきれなき黄嘴あり  
迷ひ来て明るき池の蓴舟

朱 夏 塩 貝 朱 千  
大瑠璃や森のチャペルの深庇  
十字架へ伏目がちなる雪の下  
せせらぎの音を離さず海老根の野  
讚美歌は諸鳥のこゑ明易し  
妖精は水辺に遊び森は朱夏





夏季吟旅特別吟

豊田都峰

善光寺平

木曾谷は苗代どきのあをさかな

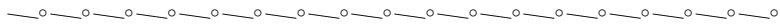
中天に銀嶺並らべ桐の花

底光る銀嶺銀座新樹噴く

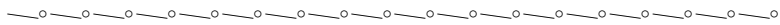
薫風の車懸りの人幡原

風発ちてたてがみとなる野の茂り

大向かうは謙信びいきの青嵐



妻女山今日は青葉の旗印  
悪役に生きて春ゆく城のこす  
青葉洩るかげも届かぬ真田の濠  
幸村を追へば春逝くかげも濃く  
若葉青葉勝てば勝手の戦記かな  
おぼすてやたんぽぽの絮山下る  
棄老をもする世や春水ゆくばかり  
夕映えの残雪木曾駒見納めに





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

磐座は雨きてゐたり濃山吹

城陽 鷺山 珀眉

片恋は過去形のままひな納め

胎の子に母は搖藍さくらんぼ  
草笛ふく故郷の山河光らせて

青饅や木戸へまはつてみても留守

アリゾナの風やさしくて花サボテン  
アリゾナ 伊吹 之博

日表のしやぼん玉追ふ風ひとひら

異国にて幼ごころにラムネ買ふ  
デュエットをテープに入れて母の日に

ほうと口あけし埴輪や山笑ふ

京都 竹内 久子

縄文の音色の土鈴梅日和

夕焼やすべては神のつくりもの

銅鐸は地霊のひびき花の冷

夏芝や黒栗鼠探検三三三拍子  
オハイオ 水谷 直子

妓王井の水のゆたかや種おろす

薫風や丹精の庭婿にお三時

目の前にありて流離や月夜茸

高槻 安田 優歌

夏帽子人それぞれの翼かな

若葉陰真赤な小鳥カアジナル  
青芝やデートの小鳥胸毛は黄

穀雨止み田畑の実りを祈るのみ

渋川 東 秋茄子

事故悲しゴールデンウィーク花の散る

孫の手に余る柏餅あんまみれ

花吹雪水浴びの鳥は花まみれ

主亡き屋敷の庭に初音聞く

さいたま 神田 惣介

捨て猫の眠るベンチや桜散る

トンネルを出れば九州春霞

川端の屋台の地酒おぼろ月

Gパンのファッションシヨも夏来たる

千葉 河内 桜人

銀座横丁風鈴売の憩ひをり

小豆餡ずんだ餡あり柏餅

緑陰の深きに奏で弁財天

度胸とは立ち姿なり寒き春

伊藤 希眸

紅梅散るかすかに罪の匂ひして

陽炎に溶けるわたくし瓦猿

芽山楓水つぼくみるおくりびと

新緑に開かれてゐる飼育箱

直江 裕子

江戸城の復元ばなし昭和の日

何もかも白紙にもどすみどりの夜

新緑の森吊りあぐる大クレーン

人ひとり沈む明るさ落雲雀

佐々木紗知

マルクスも遠くなりけり聖五月

余花の雨囀やかな意志教へらる  
蝶々に掴まれてより自由人

夜勤明けのナースを包む春の風

花菜畑紙ヒコウキのつくば行き

エープリルフル化粧上手な姉と妹

氏神の久に待ちたる鯉のぼり

生家には兄嫁ひとりいたちぐさ

母の日や壊れたままの腕時計

一村は棚田に埋れ夕蛙

麦秋や柱時計が二時を打つ

草笛の山河やレトロの旅支度

雲映ゆる湖泡立てり青風

子等跳ねて尻もち一つ潮干狩

補助輪を何度はづすや新樹影

行く春やみぞおちに染む髻女の三味

川岸に唱歌広がる花菜風

花吹雪ダリの時計を引き寄せる

空に風いざ大岳へ鯉幟

節節のごぎくり鳴るや万愚節

われさきに万朶のさくら風に乗り

花万朶花弁は蕊の闇の色

千切り絵のやうに花屑河口堰

布川 孝子

高野 春子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子

船橋 元橋 孝之